

## 留学生の動機とソーシャルサポートから見る異文化適応

-在日インドネシア人留学生を対象に-

47-186789 古賀 祥太

指導教員： 佐藤仁 教授

キーワード：留学生、異文化適応、自己決定理論、動機づけ、ソーシャルサポート、

### 問題の背景

留学生 30 万人計画を日本政府が施策した 2008 年と比べ、2020 年には当時の 3 倍の約 30 万人の留学生を迎え、留学生を対象とした支援や研究は年々増加している。しかし、現在でも留学生の多くが言語面や経済面、対人関係など様々な面での問題や苦勞を持ち合わせていることが明らかになっている。そのため、留学生の異文化適応について研究・議論が行われている。

### 先行研究

留学生の異文化適応への影響因子として、留学動機づけもまた一要因であること指摘されている。留学動機と適応との間には相関関係が見られるものの、適応度の尺度や定義のばらつきや、研究対象学生の国籍などの偏りから、先行研究の知見にもばらつきが見られる。また、動機という個人要因のほかに、環境要因を加味した調査は未だ乏しく、動機がどう異文化適応に影響するかの因果関係に関する理論的知見は少ない。そんな中、自己決定理論という心理学的理論を用いた留学生の異文化適応研究が徐々に増えている。この理論は、動機の自己決定度とその後の新生活への適応度に正の相関を予測するというもので、自己決定度の高い動機づけを内発的動機づけ、低いものを外発的動機づけと呼ぶ。この理論を用いた異文化適応研究が海外を中心に徐々に発展し、日本でもその理論的アプローチに注目が集まっている。

### 本論文の目的

そこで本論文では、留学生の異文化適応を動機とソーシャルサポートの二要因に焦点を当

てて、その関係性へのより詳細な知見を獲得することを目的とする。また、自己決定理論の枠組みを留学動機づけに応用することで、この理論が異文化適応研究にどの範囲まで適用可能かについての議論も行いたい。これら二つの知見を、今後の異文化適応研究の発展と、よりよい留学生支援につなげることが、本論文の目的である。

### 研究の方法

本調査では、量的調査と質的調査を二段階に分けて行った。まず在日インドネシア人留学生 129 名を対象にオンラインアンケートを実施し、留学動機づけ、複数領域に分けて測定した現時点での異文化適応度、これまで問題が生じた際に獲得したソーシャルサポートについて調査した。続いて、インタビューへの協力を受理してくれた 13 名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューでは、来日動機が形成される過程と、来日後、主に対人関係構築を中心とした異文化適応過程について質問した。異文化適応度は深田ら(1996)の指標を、動機づけは譚ら(2010)が用いた研究を用いることで、その正当性が保証される指標を用いた調査とした。

### 研究の結果

量的調査の結果、自己決定度の高さで適応度には多少の相関が見られた。自己決定度が比較的高い同一化的動機づけと勉学領域において正の相関が見られたものの、その他動機づけは一切適応度と相関が見られなかった。また、ほとんどのソーシャルサポートも適応度と相関はなかったものの、研究室内の人間関係が適応に影響を与えることが示唆され

た。また、外発動機づけと内発的動機づけとに正の相関が見られ、これらの結果は自己決定理論に反していた。重回帰分析の結果、交流領域と情緒領域の条件が同じ場合、勉学領域において同一化的動機づけは正の相関、外発的動機づけは負の相関があることがわかった。しかし、その他領域においては動機づけやソーシャルサポートの相関は見られなかった。そのため、動機づけが適応に与える影響は、勉学領域での適応度に限って自己決定理論に従うことが分かった。しかし、動機づけと適応度との因果関係や、具体的な影響過程は量的調査からわからなかった。

一方質的調査の結果、留学生の来日後に所属するコミュニティが、動機づけよりも異文化適応度を左右する可能性が明らかになった。留学生は動機づけによらず、一様に対人関係形成に努力しつつも、周囲との強いつながりはそうした努力や動機づけと関係がなく、周囲がいかに関心を持って開放的であるかがより影響力を持つことが示唆された。また、特に修士以上に所属する留学生は、来日後様々な交流イベントに参加するも、結局研究室のみが日常的に交流するコミュニティとなっていた。そのため、そこでの対人関係形成がうまくいかない学生は、留学生活に不満を抱え、適応度が低い傾向にあることが示唆された。しかし、インタビューした全ての学生が、他にできることがないからという消極的な理由も含め、勉学領域においての高い動機づけを維持してきたことを話した。また、日本への留学動機づけ形成過程において、周囲からの日本留学に対する肯定的意見の獲得が、内発的動機づけを高めていることがわかった。これらの観点から、留学生の動

機づけが情緒領域や交流領域には影響しない背景、またその背景が、自己決定理論が留学生を対象にした異文化適応研究において、一部範囲には適用できない原因となっていることを読み取ることができた。

## 結論

量的調査より、留学生の留学動機づけは、本人の動機と行動・成果が一貫する勉学領域において、自己決定理論通りの結果を示した。一方、動機づけの内容と適応行動には高い相関が見られず、行動と適応度との相関も見られなかった。質的調査から、留学生の対人関係形成過程において、実際にとった行動よりも所属コミュニティといった環境要因のほうが、留学生の異文化適応度へより影響を与えることが示唆された。よって、自己決定理論は勉学領域において理論通りの相関を示すものの、その他領域においては適用が難しいことが示唆された。

## 主要参考文献

- 大西晶子. (2016). 『キャンパスの国際化と留学生相談: 多様性に対応した学生支援サービスの構築』 Tokyo Daigaku Shuppankai.
- 譚紅艷, 渡邊勉, & 今野裕之. (2010). 「動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福感および学習・生活への適応に及ぼす影響」. 『目白大学心理学研究』, 6, 43-54.
- Fukada, H., & Yuh, H. J. (1996). 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」. 『岡山大学経済学会雑誌』, 27(4), 25-49.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). "Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being." *American psychologist*, 55(1), 68.